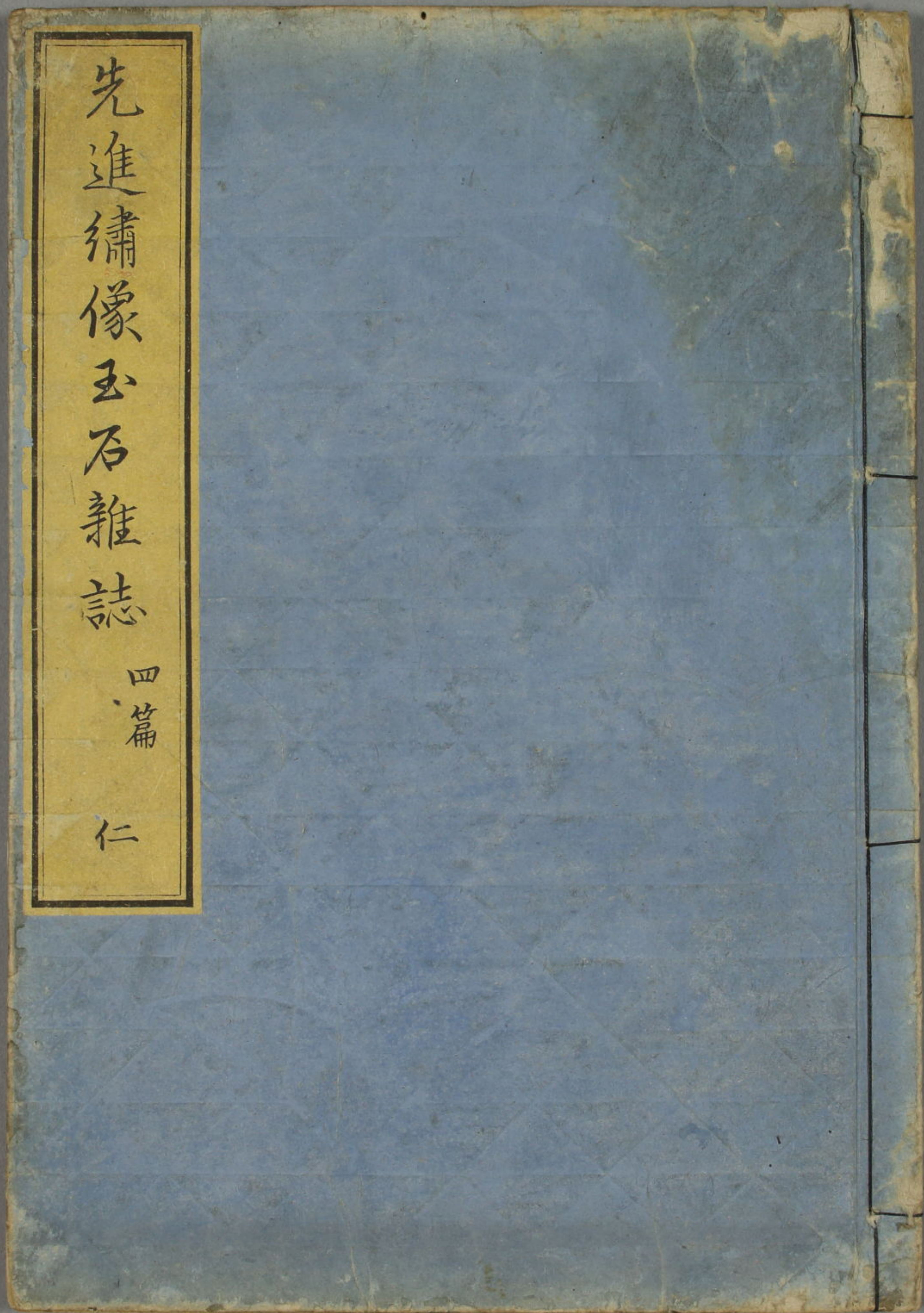


先進繡像玉石雜誌

四篇

仁

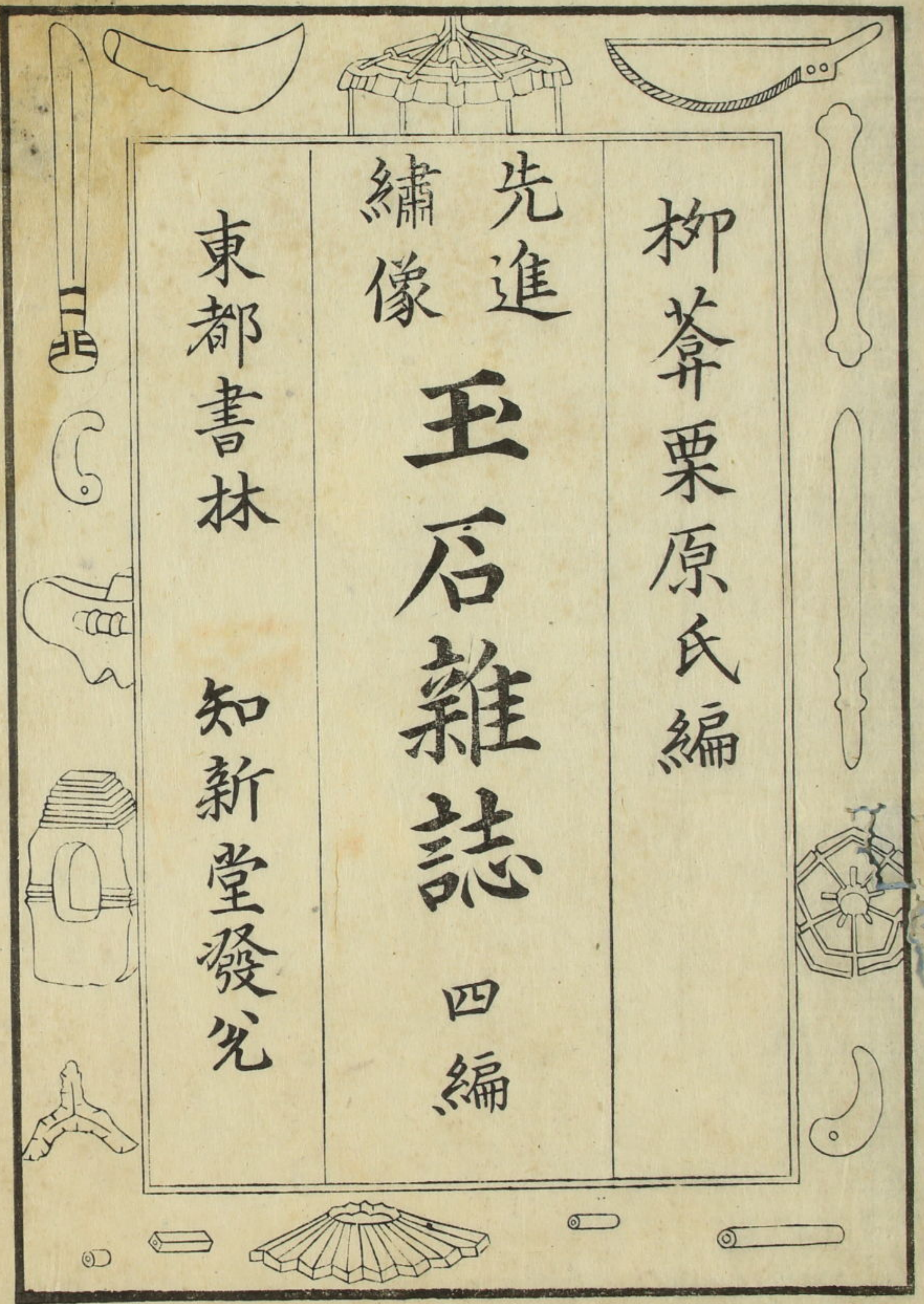


河合氏藏書

柳菴栗原氏編

先進
繡像
玉石雜誌
四編

東都書林
知新堂發兌



先進繡像玉石雜誌續篇卷第四目錄

真田彈正忠幸隆壽像

滋野皇子

望月

山本晴幸の別傳二条

内山乃大井

小田井又六郎

武名

村上本領

須乃原兄弟村上勢をめぐむく

長尾景虎生立

滋野姓

美田三代記乃誤

一騎又人乃以巾

宗尾乃大井

室賀

戸不軍

飯田河原合戦

武田家軍法

武田家軍法

海野

長野系圖

平原

志賀乃笠原

丸子

會圖乃小旗

上田原軍

近院右府

知新堂

東都書林

皇朝三軍
 伴部物部
 軍行又里
 會園の狼煙
 宿曜孫子み出
 命期短
 受領國司廻行

將軍乃辨
 宮衛直兵
 龍の丸備
 神箭砲
 木革砲
 受領官途乃許状

軍
 小荷駄乃積
 あげ螺
 火攻
 火獸
 本卦當卦
 大辰火連
 維子追

先進浦像玉石雜誌續篇卷第12目錄終

真田彈正忠幸隆壽像

信竹香掛林氏藏



真田彈正忠滋野幸隆の海野左京大夫幸義乃男かま永
正十年癸酉歲信濃國小縣郡上田子誕ふ母ハ上野國兵
妻郡羽尾住人羽尾入道乃女なり童名小太郎

子曲真砂上田城乃条ハ海野氏代々あり居海野鼻
祖ハ清和天皇第四皇子貞保親王か皇孫海野皇子と稱
以延喜二年壬戌歲四月十二日薨御葬の後小縣郡祢
津成亥方山上了葬る今官峯の山陵と号以後ハ上宮
推現と崇祀る代親王信濃國司とからせ給ハ一より
代々祢津郷ハ住せと見也申斐國志人物の部ハ海野
氏傳ハ云く清和天皇第二皇子貞國親王を滋野天皇
と号以或ハ弟又皇子貞元親王の御子善淵公延長又

年滋野姓を賜ふと云又ハ貞保親王か皇と云又ハ
貞秀親王と云善淵乃後數世ハ海野幸恒ハ皇
孫と云或ハ貞元滋野姓を賜ふ其子を海野小太郎
幸恒と云とあり今考ハ海野氏の祖ハ貞保親王と云
説ハ正義と云ハ貞保親王乃母ハ皇太后後原高子
把贈大相國後原長良公乃第二女昭宣公乃妹なり
陽成院の同母弟あり貞觀十二年庚寅歲九月十三日
誕生十又年四月廿一日親王と云ハ左京一條一坊ハ
貫隸せら於其宮町乃南ハ左を以テ南宮と稱ハ又ハ
城葛野郡挂里ハ山莊を營テ住ムハ貞挂親王と云
云龍笛ハ古部春近の品去を摹され堪能ハ在ハハ

南宮竹譜の撰著ありて世に傳へしと云ふは秦草ハ大唐水
陽孫賓乃和聲を御父情和天皇子受ふ以琵琶の大
唐琵琶博士廉承武乃撥刺を掃部頭貞敏乃女より傳
ふ以し中り各其血脈を志於せし二不武部卿の時延
長二年六月十九日又十又歳ふり薨せらる由日本
紀畧ふ見ゆ又曲真砂ふ延喜二年四月十二日と云ふハ
誤おふいし親王乃御子小菊宮と云ふし以母ハ嵯
峨天皇弟日皇子恒康親王の女とあり但紹運録を考
ふ敷し嵯峨弟日乃皇子ハ無品基良親王と云ふ日本
紀畧ふ天長八年六月庚辰薨と見ゆ其女是歳生る
と貞保親王ハ長生と云ふに十年なり配偶せしむ

然らハ嵯峨乃皇孫と云説ハ信し難し恒康親王と云
ハ仁明天皇の皇子常康親王を云ふ常康親王ハ仁壽
元年ふ出家し終ふ貞觀十一年又月十日薨せし書
家ハ若く女子あらは是ハ亦貞保親王ハ長生と云ふ
歳餘ふ及入疑ふハ一菊宮乃子を善淵王と云ふ正位
乃大納言ふし滋野乃姓を賜せし世に人とな紹運
録ハ貞保親王乃所生ハ源國忠源國孫基淵二人を
載ふ菊宮ハ基淵ハ善淵と同人おふハ一然也と云
正位乃大納言と云ハ誤あらん公卿補任ハ載せし
ハお里且滋野姓ハ爰ハ始り賜ふハお里ハ姓ハ録
ハ右京神別乃下滋野宿禰ハ紀直と祖を同くハ神魂

命五世孫天道根命の後なりと注せり又大和國乃神
別子伊蘇志臣と云あり滋野宿禰と同祖と注以延暦
十七年後又位上伊蘇志臣家譯改め滋野宿禰乃姓
を賜たり弘仁十二年小宿禰を朝臣と改め賜へ
ん家譯の二男を後位上揚津守滋野朝臣貞雄と云
貞雄の女文德天皇小侍一源本有源載有及以源滋
子を産と三代實録ふと也文海野と云ハ小縣那童女
御お里と云里善淵乃子を滋氏と云母ハ大政大臣友
原基直公乃女と記せり滋氏の子を後三位為廣と云
為廣乃子を後位下左衛門尉為道と云為道乃子を
武藏守則廣と云則廣の子を後守重道と云重道子

男子三人あり長子海野小太郎廣道二男称津左衛門
道直三男望月三郎重直あり海野ハ河濱を以て紋と
か一称津ハ九曜を用ハ望月ハ七曜を用ハとかや廣
道乃長子海野小太郎幸恒乃子幸明と一先ハ小太
郎と称一後子信濃守と云其子幸真之乃子幸盛之乃
子幸家之乃子幸勝まゝ又代乃際小太郎信濃守と云
ハ現任乃國司了あゝて成功乃爵おふへ一幸勝の子
海野小太郎幸親保元乃軍下野守義朝の子ハ屬一
望月根津神平と共ハ内裏へ氣里鎮西八郎乃因あり
白河殿乃西門子戦入る功あり保元物語 幸親乃子を
海野弥平ハ郎幸廣と云本曾義仲子從之筑摩川を涉

里城乃太郎資永を討破り備中國水島の軍小大乎乃
大將軍とて村田乃兵衛盛房と組討せし飛驒の
二郎兵衛景家を討せりけり幸廣の子小右郎幸氏ハ
木曾義仲の長子志水冠者義高乃鎌倉小質とて赴
く小隨ひ後子従又位下小叙し左衛門尉小補せらる
弓馬乃藝を以て世子賞せり幸氏乃子幸继左衛門尉
信濃守たり會田塔原田次利屋宗下等乃氏乃祖と云
幸继乃子小右郎幸春乃子幸重徳乃子幸康乃子
幸遠徳乃子幸永乃子幸昌乃子幸信乃子幸定
乃子幸秀乃子幸守乃子幸則乃子幸好乃
子幸光乃子幸持乃子氏幸乃子幸棟乃子幸
五十四ノ二ノ五

代相傳志々左衛門尉信濃守と云幸棟乃子棟綱ハ即
幸義の及む然也貞保親王より幸隆まゝ二十ハ
代小當れ也

天文七年左京大夫幸義村上義清と小縣郡小戦ひけり
小幸義打死し一族郎従死す散亂せしかは幸隆上
田小安堵せ以碓日嶺を打越し野國群馬郡蓑輪なる長
野信濃守業正乃許小客人乃體小く潜居けり是幸隆廿
六歳乃時也

世小真田之代實記と云書あり作者を詳小せ其説
小海野小太郎幸氏木曾義仲乃嫡男志水冠者義高と
共小鎌倉へ入質とて下向せし小義仲頼朝小道公

古女旅装

一遍上人繪ふ載たり

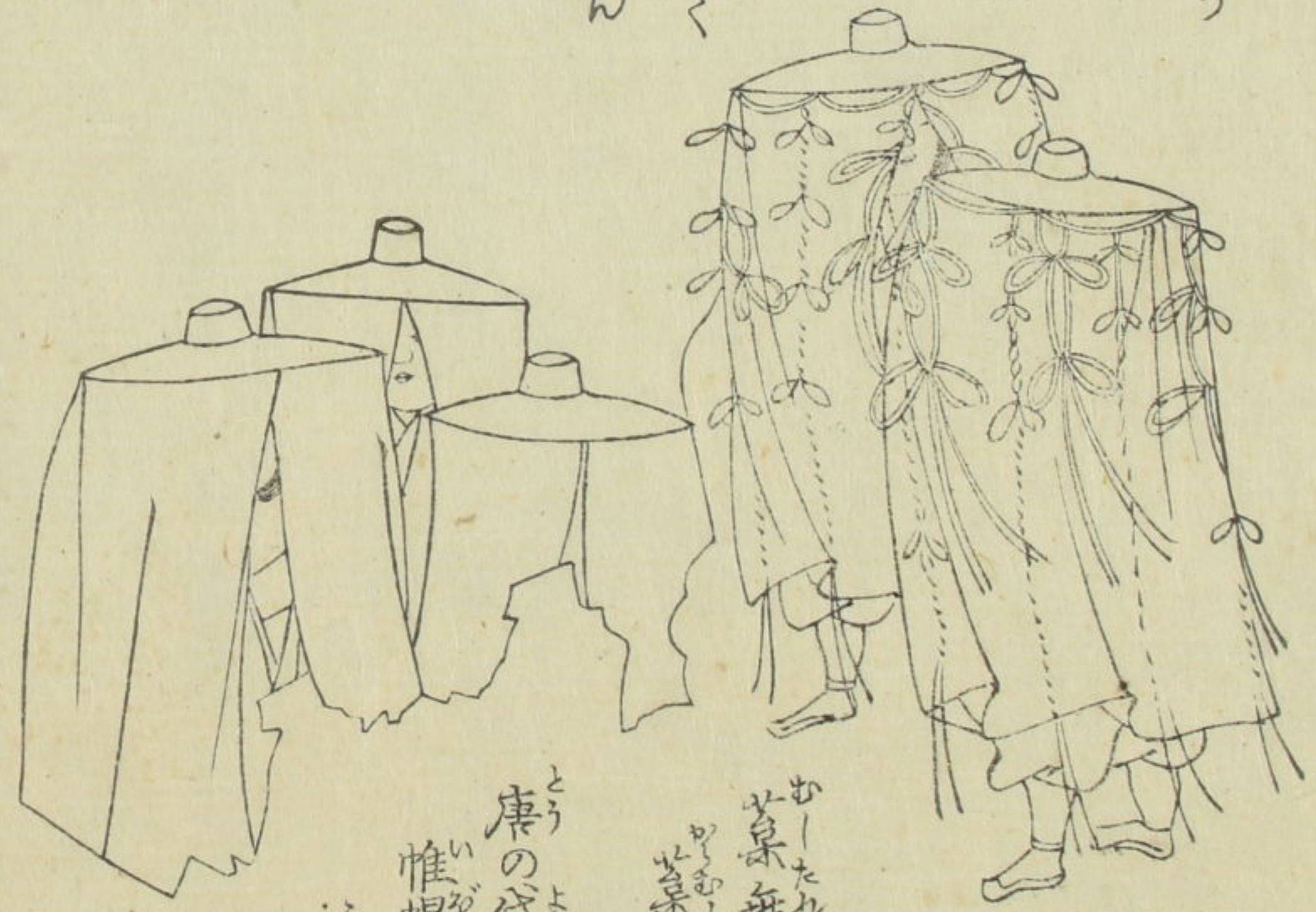
土佐將監筆写り

鎌倉北條家の末

まゝの凡俗と

清水冠若かり

おけーからん
体み



おしとれさぬ
草無衣ハ

草み

ひくる

唐の代の

帷帽を

うのせ

ものあり

別み

考あり

玉四ノ二ノ六

尾張熱田宮再興乃繪

享祿二年二月廿日筆者加野

和泉・祐筆資信

今嘉永元

年

三百廿

年

前の繪

側侍の女

の女

主人の体



の聞えある不依く範頼義経を誅せらば義仲勇
ありと云共終ふ栗津より流矢乃爲ふ亡ひぬ其
嫡子亦是は志水冠者に誅せらるる海野幸氏の念
子思ひたる共さへを様如く是より武田清光の方
かく是居けり清光海野の英雄を知り是は客分と
く置けり是縁不依く幸氏の子孫武田家に入つて苗
字を真田と改め累代乃長良大と見ゆ是説信を
から以志水冠者の頼朝卿乃婿大里と云共義仲の嫡
男か早宿むへきり非以頼朝大姫君乃知食んとを恐
ふ入り故に竊に昵迎に輩ふ仰合めらるる乃如何
志くは姫君乃御耳に入らん驚き思召義高を婦人

乃体ふ作里あし密に鎌倉を出し幸氏を義高の腹
内より臥し女宿直乃老を欺き去ると由遂に事露れ
義高誅せらる幸氏の禁囚せらるる死せるとも幼雅
あし主乃命に代る忠義を感しあし舊領を授けし
武衛乃家人より列せし中東鑑子見白舊領との上野兵
妻郡之原庄信濃小縣郡海野庄を去るる元暦元年
月乃壬子幸氏十三歳の時を建仁元年城小太
郎資盛謀叛の時幸氏二十歳大に戦功を顯し承元
年十月上野之京塚の事を言上しけり時ハ左衛門尉
あし二十九歳なり嘉禎二年北條文郎時連始り流鏑
馬射けり幸氏多馬の故實を語り座中の射手

をり先泰時朝臣を蔵せし先右大將頼朝卿乃時天
下の人乃射手たりしを揚し六十歳乃時なり
其明年七月射術故實堪能あるを以て此象時頼朝臣
乃所となり仁治二年二月幸氏武田伊豆入道光蓮と
上野之原本之信濃長倉係の塘の土を論せし幸氏
申狀謂ありし理運乃沙汰し與りしなと云と東
鑑及び武田家乃記に見るは是等乃事實不疑く見
ふ幸氏武田清光乃許小密たりと云の虚証なりと
疑ふ一旦武田清光ハ武田太郎信義の父あり仁安二
年七月八日又十九歳あり幸氏と武田系譜に見ゆ仁
安二年戊子子の幸氏いす生建武武田伊豆入道光

蓮との清光乃子武田信義乃家督武田伊豆も信光乃
之幸氏武田家乃隨從乃恩あらば何と志く領地の
塘を論せし武田清光乃改めし幸隆上田を
去り真田村に暫居せし時より云然る武田信義
と跡部信豊と合戦乃時真田次郎三郎幸義跡部を射
くまを殺し武田より左京大夫に改め佐久郡岩
尾城を預らば曲淵左衛門の女を妻とす彈正幸
隆を生しむと同書ハ記せし信昌跡部と合戦せしは
寛正六年あり武田信昌十九歳乃時なり跡部信豊
と云の上野介景家乃之甲初西保小田野城に於て
切腹と甲斐國志に見ゆ幸義乃射落せしと云ハ誤り

寛正六年より幸隆乃生也。永正十年より四十九年
なり。史より廿九年より幸義討死を不とす。寛正
六年廿歳許と云く。七十許より幸隆生也。九十又六
より幸義討死と云く。年終み於て疑み。眞田乃
名字幸義子起ふ。あり。幸隆乃母曲淵は
左衛門乃女と云く。大に怪む。曲淵は初鳥若とて
板垣信方乃草履取を里を武切に依り。晴信朝臣
出り直冬より。板垣乃同ふとせし。中斐國乃史乘
子詳し見ゆ。然る時鳥若乃曲淵と云く。晴信朝
臣乃代より。幸隆は八九歳の頃なり。實は曲淵の孫
ありと云く。板垣乃草履取の女を以て。幸義を嫁に。寵

多敷と云へ。か。厚むと云へ。か。岩尾城の。大井彈正
忠行。文龜永正乃頃。是城領せし。世子曲乃真砂子見
ゆ。天文十三年十二月。小室内。公前。公岩尾等の城より
降参せし。世武田三代記。見ゆ。幸義乃岩尾子。城代大
つと。と。徴とせし。か。板垣

長野信濃守業正の伊豫守憲業乃嫡子あり。母ハ小幡之
河守重朝乃女と云く。父憲業ハ上杉民部大輔顯定始り。上
杉平井乃城に住せし時。よ。味方ハ屬し。顯定乃養子。上
杉四郎顯實。實子。上杉兵部大輔。憲房乃子。上杉憲政。之
四代。又十餘年無く。乃忠切を立し。か。及。上杉幕下。小於
長船乃右子。お。新中。の。お。無。と。と。天文三年七月。業正

父の家督を襲時年六歳なり智謀勇果萬人を勝せ寛優
温恭隣國に接する術を得た是は關東の名將勇士一且
上杉家の政道を疎く面々乃在所に引籠る平井へ出仕
せり一輩中業正一人を準的として非番當番乃急を
俛言申年始八朔乃太刀馬を贈答一偏に管領家中興の
運を嗣かんて遠く見えし子依り幸隆より遙く
と菘輪まゝ行向ひ其旗乃平久從ひ父を離れ村上義
清を討く不共戴天乃怨を晴さんと報せ

一書ふ武田信昌廿二歳より卒去ありしかは親權公
縣左衛門清之乃計ひみゝ信昌乃二男竹王丸を十二
歳より元服させ信繩と名乗る家督相續させ以時真

田幸義乃嫡子徳王丸を元服させ次郎三郎幸隆と名
乗けふと見ゆ今考ふ武田信昌の永正二年九月十六
日逝去年又十九永昌院教傑山崎公大禅定門甲斐國
万力筋落合乃永昌院に葬ると甲斐國志に記せり然
らハ廿八歳と一書ふ云ふハ誤か耳幸隆ハ永正十年
乃誕生お也ハ信昌との時代同一から以て永正十六
年三月下旬如賀美二郎を武田信虎の嫡さんり為し
小幡日淨原大隅守小幡部を陣せし処へ真田次郎三
郎幸隆二男海野二郎幸綱二百餘人ありて來會けり
云と由幸隆ものかう七歳より將帥として血戦に堪
へからん

爰不上於憲政ハ累代關東管領乃權と伊豆上野越後之
國乃勢とを倚頼る長野業正ハ匡救乃誠を以思ふ以便
倭乃小臣を以馳走せらるる不と何一ハ大身乃
隊將相互了嫌疑ハ已る領邑ハ溝渚を浚一榭牆を築
ハ割據乃色を以く一鄰國乃憂を訪了遑ハけり不
よ一幸隆乃本意を以打ハ一援を請ハ一時を以以兵衛
と志く日を消る内了天文九年伊勢國司北畠中納言具
教卿乃老長野右衛門親綱乃許ハ業正よ一使者を以
ハ物を饋る一乃有けり了而餘里乃行程を隔ハ然ハ四
方皆敵國ハ是事故ハ一伊勢ハ到ハ是著ん一火ハ難ハ一
之ハあまハ一乃進物を運漕せん一と容易ハ一以ハ一菱輪ハ諸

老長額を集め一會議志けり一と一幸隆ハ使者と志く
伊勢ハ一約ん一を望ハけり一業正大ハ奇ハ多勢ハ人ハ
難ハ為一を年若ハ御邊の河ハ一故ハ我ハ有ハ
然ハ一我ハ色を疑ハ人ハ故ハ一問ハ一非ハ一其概
を語ハ一有ハ一時幸隆答ハ人ハ一識ハ一仰ハ一
ハ一覺ハ一他殿ハ使者ハ一為ハ一了ハ一事故ハ一遠ハ一
ハ一推量ハ一以ハ一若ハ一難ハ一思ハ一
ハ一業正何ハ一我ハ一達著ハ一思ハ一云幸隆不肖
ハ一共清和天皇乃後亂ハ一生ハ一馬ハ一傳ハ一
ハ一術ハ一色品ハ一替ハ一共ハ一様ハ一入ハ一以ハ一言ハ一
ハ一漏ハ一也ハ一と一中志ハ一業正ハ一又ハ一問ハ一以ハ一形ハ一幸隆ハ一進

古男旅装

親鸞上人繪
浄賀筆



玉四ノ二ノ三



物を請取家了歸きて乃ち旅次乃用意申せ以平常の如く予を嚮馬を馳あふ川狩を以て一日を暮し斯く廿日餘を過し後幸隆何地へ行しや掻暗見え以て真田の家人驚きさ日く之限如く業正の色を伺と云共只知以顔し申す時々指折し黙笑ふ乃之
長野系圖を按し在京業平朝臣十口代乃孫子右兵衛佐業家久月親王子扈從し関東より向し伊勢國度郡長野庄之子町を給しよしよし長野氏と稱し乃ふと於し業家乃孫長野左衛門尉業忠乃嫡子長督後理亮業綱是利尊氏卿子近侍し後基氏卿と共に鎌倉子下り上野國群馬郡又子餘町を給し是箕輪小位

乃し業正と業綱又代乃裔と業綱乃弟長野右兵衛康忠ハ伊勢國司北畠權大納言顯能卿子屬し伊勢國小位親綱又代乃祖也
然し幸隆何れ也は斯く振舞を以て川系申し進物を請取し直し心易き家子を伊勢大神宮乃御師に蒙りかゝ其荷物乃内へ隠し武藏相模乃檀那に送らせて東海道をよらせ又勇力ある家子に又人を六十太部回國乃修治者に托し外あり御師に援と云し今ハ申す伊勢尾張に到着しらんと思ふは我身日夜に混じり碓氷嶺を超越木曾路を尾張乃國へとお立ち時實に長野乃進物をハ幸積し入し幸隆夫に托し荷擔しと申す

是ハ長野ノ家人等ノ内ニ幸隆カ使節ト立夫カトを
と思入人ト有ヘシ、是等ハ道を遮リテ如何カトを
為たらん、其莫クハ煩々、カカ不慮、是を避ん、爲シ御師
六部をハ装束出テ、好ク又我家子トク、小舟任セテハ、渠
カクシ、我ハ實ノ物を、我身ハ副大目ト、好ク、素名乃
渡ル、御師六部ト集會、それヨ、更打連、長野ノ館ヘ行
向ハ思入、依テ、爲保、東海道を駿河ト、下、山本勘助
晴幸子面會、我身乃、沈論セ、由を語、更、其ハ、晴幸村
上を亡、一、本領を取返、主ヘ、手策を論、以、幸隆止、更、其策
を、同、よく思入、去、共人乃、爲、使、私、止留、ヘ、其、非
々々、只、一面、カ、別、更、上、列、ヘ、立、歸、方、長野家舊
記、見、也

山本晴幸乃傳、既、不、成、後、二、傳、を得、夫、其、一、ハ、駿河
富士郡山本村宗持、禅院子傳、人、不、如、其、其、説、不、鎮守
府將軍源満政乃裔、子、木田太郎重季、承、久、合、我、乃、時、京
方、亦、未、且、大、且、け、不、罪、科、子、依、誅、せ、ら、也、一、其、子、孫
駿河國、ノ、潛、居、者、吉野某、ト、リ、ハ、富士郡山本村、子、住、
ハ、幡宮乃祝戸、ト、カ、吉野、淨、雲、入、道、ト、云、入、道、乃、二、男
禪正、貞久、今、川、家、子、住、ヘ、山本ト、名、衆、所、領、ハ、山本
内、三、沢、衣、宮、三、列、賀、茂、乃、内、合、之、百、貫、文、曹、の、前、立、ハ、
幡乃神、舞、を、殿、家、乃、夜、々、之、巴、亦、且、文、明、十、年、七、月、十、二
日、参、列、不、我、死、以、法、名、を、鐵、關、直、入、ト、云、貞、久、乃、男、圖、書
某、乃、子、彈、正、ト、云、妻、ハ、庵、原、安、房、守、乃、女、男、子、數、人、有、

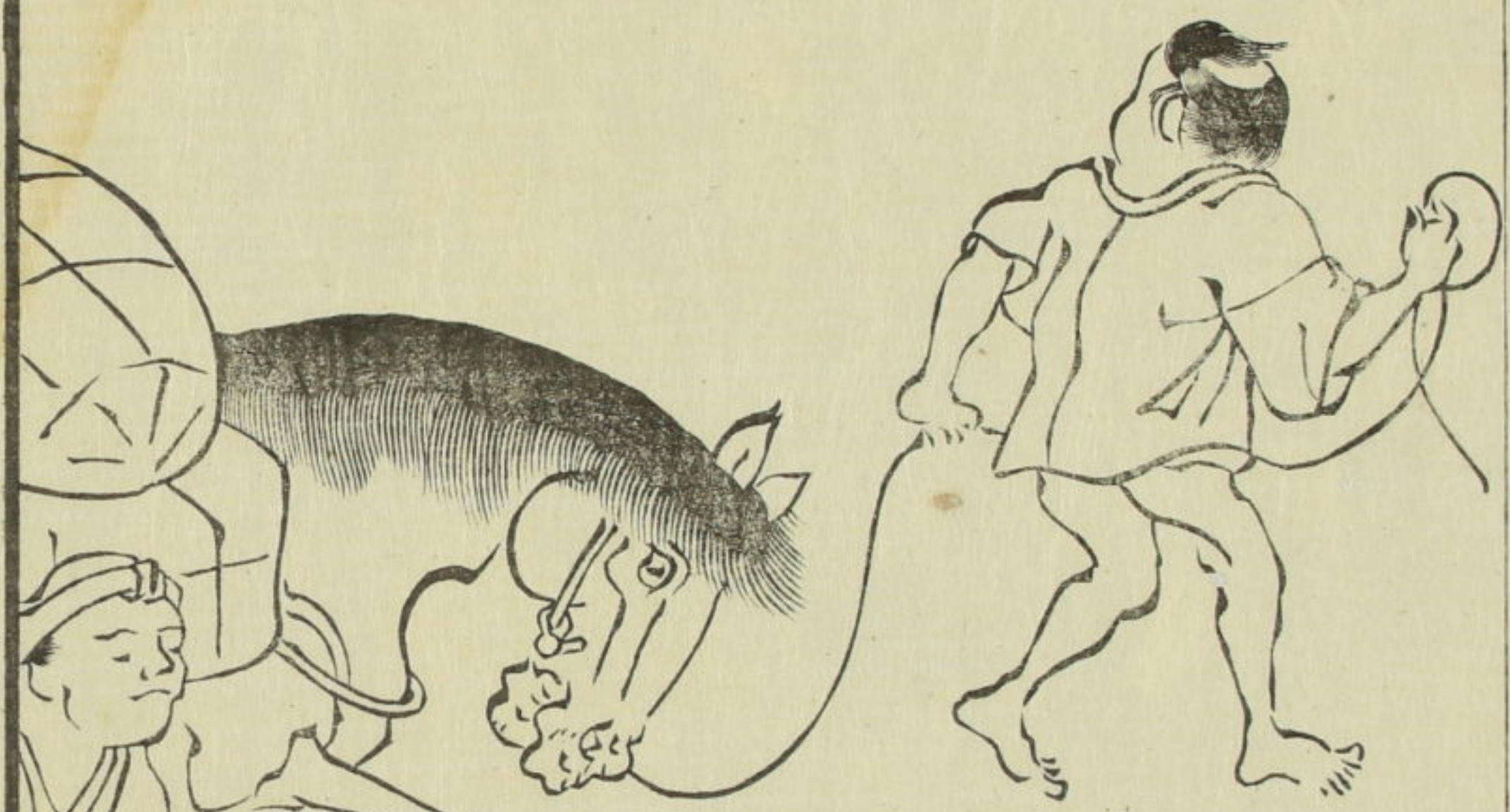
曰男源助貞幸十二歳ふ〜〜三列牛窪牧野右馬允乃
家令大林勘左衛門ら養子となり勘助と改め廿歳の
時大林乃家を出徳列偏歴多しと三十餘年又十二歳
乃歳去田家了仕へ諱字を幼く是晴幸と改め永祿四
年中島子死以鐵岩道一禪定門と云と〜次説の
如く永正元年牛窪了徳同九年牛窪を去と剛也然
らハ晴幸ハ牛窪了住せ〜晴信朝長未生以前乃と
相見晴信朝長十四歳乃時晴幸を牛窪小訪五ハ〜と
小山田板垣乃家傳了記せ〜と合〜疑入〜其二
ハ近江源氏山本遠ハ武定七代乃孫山本義又郎或
貫ふ二人乃男子あり一ハ山本圖書或了と云二を勘

助晴幸と云去田家了仕人或了ハ越前朝倉義景小仕
へ或了乃子傳兵衛或清亦賀ふ仕へ百人扶持を更〜
と云去清乃子三郎兵衛或頼乃亦熊谷安左衛門と
云江戶淺草本法寺熊谷稻荷の本願人なり系圖本法
寺小傳也也又北越軍談ハ晴幸父を勘右衛門と云
敬野新次郎成定乃彼管なり殆又山本常刀左衛門或
氏小兵法を學ハ後ハ寺部乃鈴木日向守重及子從〜
兵法乃奥秘を傳へたりと云又其傳記一皮世ハ猶
考〜然共天文九年晴幸四十八歳駿河子あり〜真
田幸隆子會〜之ハ掲島〜〜疑入〜〜非以
幸隆菘輪子歸〜伊勢乃長野乃旨趣を報せ〜ハ及諸老

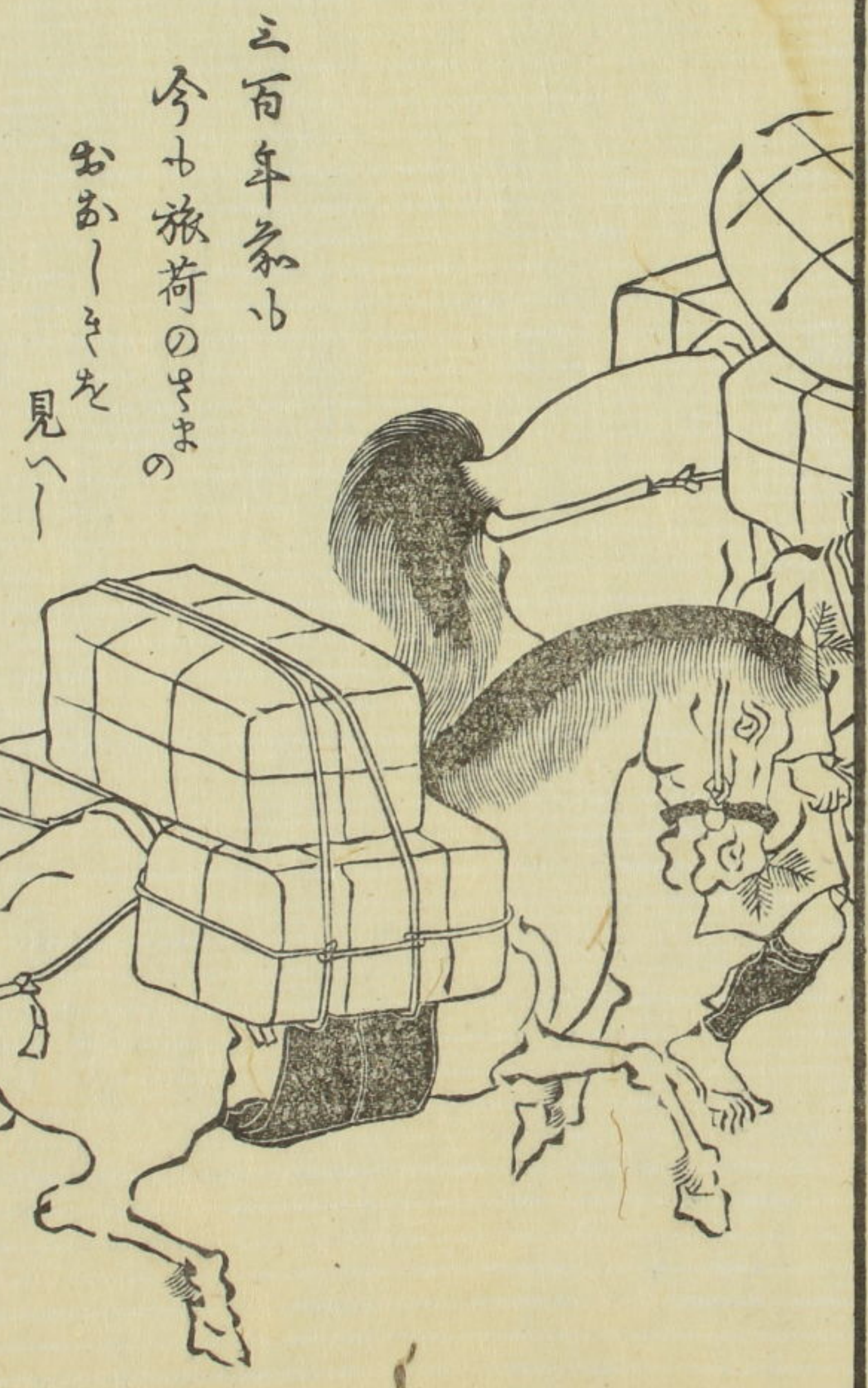
反舌を振く其器量を賞歎し若齡同士の側目其功勞
を媿疾を乃由多かり志の及結白業正小終るの意を置
やうに見えし憂懼か及け人情形り斯くの爰ふ由
長く身を安く措難からん不鬼や為ま角や計らんと
思惟如く往歲駿河より一面譚ひけふ山本勘助乃使あ
里何事やらんと思ひ呼入る子細伺ふ山本今武
田晴信朝臣乃招く應じて甲斐乃國子あり晴信朝臣乃
胸襟を推量不逆く兵を發し信引乃諏方小笠原村上等
を斃し其地を并せんと欲り如く若實不然らんと幸
隆及乃仇を復し本領入部まへり時遠から以覺之
一旦當國へ御越へりやと擧演たり乃幸隆小内之は

退きやと思惟乃不折節お是は隱密に返答し山本
乃使を以返し一日二日過る後所勞如あ是はと出仕
を止し引籠り打取我家人子由容易く對面せ以業正
由を問使を之に言せけふ幸隆乃疾病尋常の醫藥乃
治まへり小洲以當國甘樂郡乃奥餘地乃峠を打越り良
藥を求むるに於て今日明日乃内ふ思立へり馬共
多く引立たる幸隆大に驚き於ら然ぬ解ふもが
御志乃程の如くあはるし辱おくも存以へ共所勞以の外
大事少く莫くお立へり由覺以と人答志共業正御
所勞大事のやうに承せりいと治療乃落し一日由
早き方お我れお癒けと確し志るは幸隆由叶上り建

結鞍古圖 天文年間繪



倭名類聚抄
 唐鞍 後鞍 和鞍
 結鞍の口品を載
 けしつらに唐装束を
 うけしつらに御物あり
 しかしつらに和鞍
 の日本装束あり
 結鞍の荷を
 結むと人
 くらひ



三百年來り
 今も旅荷のまよの
 におかしさを
 見へ

友人武清藏幸あり

其曉出立一宮を遠お志程の如く下仁田に至りて其後
馬共多く荷を負せし者其を見れば皆真田の家具
其跡より真田の妻や家僮かとの有かりし事亦連きて其色
里何れ斯いと怪めは左以教の立出ある跡に續き長野
乃老一二人其業正乃課以とく如斯出立せ此女に追
及以半如く致し進りせ以へと申す渡りし如く云
女袋より文取かしく幸隆より波以幸隆披し見込へ甲斐
小晴信朝臣あり着き入子又有きし弓取あり但暮論
子業正より有ん限る左右なく碓氷川を越し馬に草飼
んと思ふ入倉りし連り本領に歸入むと隣交を忘
ぬふやしと申す細々と書きたる幸隆も業正乃心中

慚かしく如斯有んと兼く知をらは打現く譚入へし
包しと出せ難面々色と馬を停め暫時々々も里然り
引返を極し小有色は信濃國佐久郡に打入海尻平澤
を徑り甲斐國巨摩郡柳澤に著り山本晴幸の家僮迎り
為しお來り行會ぬ互に喜ひ言交し前途を急げ其
夜山本より宿所より到り着夜明く晴信朝臣と角と申せ
馳り對面ありし宣ひは御邊の先祖小太郎教と其
の叢社伊豆前司信光と鎌倉殿の幕下より親しく申通
し以て舊記を詳かく記し以て更し疎意を存せ以海
野の領知三原庄と當家の領知と境續て以て其地は東
鑑に志せしは是れは今村上義清の押し所務を佐

久小縣乃二郡ハ海野と武田乃舊領子よりハ晴信ハ
佐久郡を中受へ御邊ハ小縣郡を御奉養ありと有
かば幸隆父子悦々信列ハ立歸ふへき支度乃ため爰彼
子潘也居け海野普代乃兵士を招きりふ何しり
方小岡久々称津望月會田塔原田澤借原岩下等の一
族をもち先我ゆくと馳集りけは役ふく二百餘人
減りたり

晴信朝長着到り真田二百五十騎海野八十騎會田十
騎矢澤十六騎塔原廿騎称津三十騎望月六十騎と見
ゆ是は滋野乃一門二百六十騎と知ふ一騎又人と
積里二又三百二十人乃軍賦と志らふ爰ハ二百餘人

と云ふ一騎兵士を介あふへ

其頃佐久郡内山小及大井小次郎隆景岩尾小及大井彈
正忠行平原小ハ平原右馬助ハ道全真芦田小及芦田備
前守信常村上方小ハ武田一味と云ふ小ハ武田
己々一分を守りて只堀を深く一堀を修り籠居け
ふを幸隆竊に語合け是は一濠小ハ及ふ皆武田家ハ
與力合伴乃誓書を贈りて佐久郡ハ大形定まらぬ然ふ
小小田井又六郎同次郎左衛門兄弟幸隆ハ譚説子應世
を結句各糧を用意し玉薬を調鍊せよは別えりかば天
文十三年十二月十日尾臺乃城ハ武田家乃軍兵八千
餘人あり押寄たり折去り尾臺の城と云は碓井峠乃西

輕石和よ里平尾岩村田へ乃通路小室通る乃追分と大
井乃古城と乃中央形り要害乃地小中あり以後援乃頼
小形き小又六郎兄弟より軍し次郎左衛門ハ小幡孫
次郎小討也又六郎ハ曲淵勝左衛門小突仗ら也後卒ハ
思々討死し城終り落たりしかば佐久郡ハ平均小治
多里ぬ晴信朝臣是全く真田ノ勲功方也とく大賞を
行か多里岩尾乃城至小替ふ終り小幸隆上田を落
七年流浪し初一城乃至小成り終り小本晴幸ハ秘計
ヲおし晴信朝臣乃深恩ありと肝小銘し骨小刻む
悦合是より無二乃味方ハ為り多里是歳幸隆卅二歳
なり

小本晴幸乃真田幸隆を奉り佐久小縣乃地を定めし
ハ秦乃滅んとす於時項氏楚を誦へ田氏齊の地を畧
せし故智を假しと初也幸隆亦武田乃力を以て及
乃讎を復し舊領小還ふを得た武田家乃僮僕と一
列し北面乃位し著しを慚さけり如し
幸隆岩尾乃在城し武田家乃為り小縣植科高井流磨
川東を定め遂に川西乃諸郡を蠶食まへり勢を示せし
かば小縣郡室賀乃小城守信後入道一葉軒元乃云右
衛門尉矢野乃祖馬守頼綱根津乃美濃守信直武石乃大
井竹葉軒小棟小泉乃内通助宗貞等より合し語合りか
る武田晴信乃軍ふ又信虎ハ此事替り賞を重し罰

を緩くし士を貴く衆を愛さる故に軍士八千餘人の
故乃如しと云共戦了臨く死を致し力を竭き兵士の十
萬の由敵以爲し然らぬ村上の終りの打負へし歸去や
我より武田家と合併し身より安穩を計らんと存る
の如何あらんと云は何由誰の斯の思ふにあらんと忍
び一味同心志く結真田了け命を告げれば武田志よく
おぞ思ふ也の神妙乃御計策やと色代し居る家より
人質を喜隆徳とて天文十四年正月何日甲府へ戻向し
晴信朝臣の對面の禮を我遂たさるる尾臺合戦の後
干戈を動さく志く小縣乃諾城意味方より屬せし真田
か計畧の依如なりとて甲府の君長是を喜ひたり

室賀廿騎丸子卅騎矢澤十六騎孫津卅騎武石卅騎小
泉廿騎と甲陽軍鑑より見ゆ室賀の小縣郡乃西北あり
筑摩郡青柳麻績更級郡結捨公小隣其祖を室賀二
郎盛快と云多田満仲乃弟下野満快六代乃孫あり
丸子の小縣郡乃東ありと佐久郡公郡茂田井尔塙人
或の圓子鞠子子伝ふと右衛門尉俊子民部少輔と云
馬場美濃守乃婿となり駿河清水乃城代と云依田
乃支族なり矢澤の小縣郡乃北真田乃南あり海野
の一門あり頼綱の幸隆乃弟あり共り人孫津の矢澤
乃東より續く美濃守信直の左衛門尉道直十九代孫と
云後入道とて松島軒幸安と号し武石の丸子の南あり

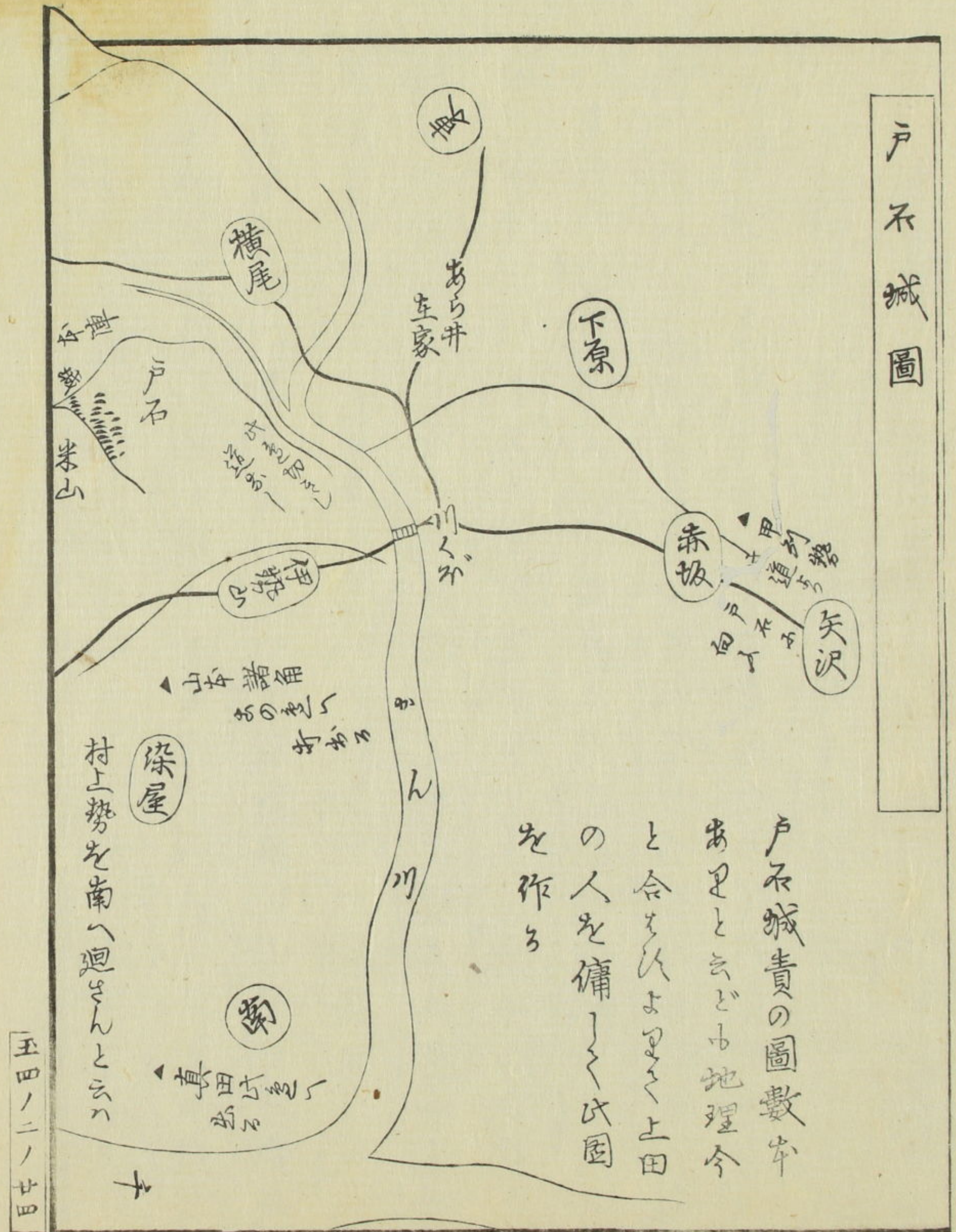
志く和国嶺子近一火井竹葉軒山棟の大和守信廣の
孫赤目信廣乃及を定作也先照と云小泉の室賀の東
筑摩川を渉り上田の隣り村上乃支流の源氏也
又月十二日晴信朝長甲府を進發あり十月日小室の
著せ玉入中岡へ一か及幸隆の岩尾より飯富兵部少輔
虎昌の内山より冬舎一相本市兵衛正朝
下野守信守望月甚以郎重氏前山を教依路平原等の諸
士を小室の會せしめ晴信朝長對面あり太刀腰指乃
刀馬鞍を其程より後引せり是は新冬乃法士其應
對乃懇切かあを以幸隆の勸誘乃慮り切りさふを
語り續き説ひ傳へ志程一御一村の一騎合乃士あり

幸隆を慕ひ如何ありし真田の親こよ晴信朝長乃
御目り懸らるやと思はぬ者も我無り乃是同を十九日
午刻諏訪高島乃城代板垣信方乃形跡来り木曾伊奈乃
諸士小室泉と一味一潮後時へ打知る由を以晴
信朝長に進進を聞や各佐久木縣乃仕置を以真田飯富
乃二人乃任せ即日潮後へ發向あり
世々真田幸隆岩尾の傳せし頃山幸勘助尋ねる兵を
論せし一節を記せし書あり偽説信をへり其説
子勘助廿二歳今川義元子見えり用ひらば九年の
後天文八年岩尾の至り真田の見ゆと云り勘助廿二
歳永正十一年あり今川義元誕生乃永正十六年

五年先夫ち天文八年ふ真田義輪子存くいしむる
尾小佐世以是等時代乃相違せぬと云は乃謀を承

能問ありと思ひ小縣郡へ討て出た真田と弟と共以後
失ふて形並は爰彼乃公々奉々子遠筆を夜々燒せしか
は甲斐勢乃佐久小縣へ後援せられ見えざる義清
小不意を討んと計り小敵を斯くのり備ありて味
方乃利光束ねしと思ひしや人数を早々引上りて
新く飯富兵部少輔を使者潮鹿崎に遣りけ事を告げ
よよ日晴佐朝長持梗原乃軍を棄て川原訪へ歸陣有

一日人馬乃是を休め同廿七日小縣へ引返し入
云と小村上ささく不引返きたるは皮小室小之日逗留
ありく田中海野戸石乃邊へ是輕を出し放火し我を
挑むと云共村上更にお舎ねの又諏訪へ引返する是後
村上いふ真田を心憎き者おひく容易に軍せん共
せきりか皮佐久小縣乃兩郡志しゆく穩やう入見
大里乃咽也天文十一年三月上旬晴佐朝長戸石乃
城を攻へしと云粟泉證之共田下野守信守相木市兵衛
正朝川上入道依地福保平保等を始め信列先方元を
向ら新けしと云粟原日夜入る間謀乃者是故しと
石乃城代津久左衛門の妻死たすけを華送乃為善



光寺へ赴き城内無勢を討ててを告げし依り依り
十日日戸石へ押寄軍しけり村上義清七子六百人乃
兵を帥ひて甲利勢乃後へ切て懸子真田を我勢とて
引分て二百騎村上の後へむけし旗乃子を進め螺鐘を
鳴り大勢乃押し如く為たりけり然るに我清餘り不
深く進み戦へば真田より遊軍乃方便既し虚しく成ん
とせしより山本晴幸晴信朝長を請て徳角豊後守
勢を帥て矢原より戸石迄乃ありて押し出さる備を
村上勢出を見し朋勢を南へ廻りて是は山本徳角乃
備乃外へ縁子人とし討り難きとて林乃外也野乃米
了大勢よせ是は里村上勢とて晴信を討ち抜た

的勢を取切りてハ叶はずと云然り兵士機を奪りて
惘然たる處へ小山田備中も加後駿河守急に進み戦
ひしやとて敗軍忽ち勝軍と成りたり然共甲利方
一人當ふと懸せしけり甘利備前守虎泰横田備中
高松を始とて歴々討死し士卒千人許死す川也は
晴信朝長以乃外に愁傷し御座より誰云と如く風雨以
此事終る隱也如く武藏上野乃巷説區々ありしかは上
校幕下乃諸將倉賀野見回上回和回山上深谷後閑長根
等集會しし間如くハ武田家乃滅入極時前到來と
云ゆし歸去佐久郡へ打てお信列の武田持乃城々を攻
落し其勢子依り甲利へ押寄せ神子筋より亂入ハ何

程猛く働くと甲府武士乃敗走せんと鏡おかけ見
か如し甲府をくみ打落しなハ諫方乃板垣内山乃飯沼
小諸乃小山田備中なとの謀を易か不難しと議した
るか了何由皆以評定し一決しと逸打立んとせし
藁輪乃長野伝濃守業正あ忠を拒り中け教は能由上板
家乃多義ハ末うなりくひよか甲斐乃晴信今年廿六歳
と岡武畧子長し常小士卒を鑠鍊しと斯く來練乃以て
ぬをよび大將乃甘利討死すと云共其隊長米倉丹後も
踏止く其場をさう以合戦を持味たんな忠加ふ山本勘
助とく諸國を經歷しと名將勇士乃道を飽すく關係大
分曲者を込頃招く技持し魚晴信日夜鍛鍊せしと如也

他國子打物くせら戸石あく乃振舞を見玉入屋一數代
調練乃村上小事の如けし計策也と怪し負軍せしと聞
し是を武勇乃勝劣乃よふ以て以て全く兵法乃奇計も出
たふ如く殊よ以て邊へ漂泊せし浪人等ハ臆病者共あ
戸石乃軍場を悪く仕り腰抜拂し拂せし者をもへし
さ如くハ某ハ許し暫時寄食てひひし真田陣より各々
を計らん為し風説を立かひ浪人を由當國へ入込せ
たふからんし邊中其謀を隔り玉入等憂懼たて業正ハ
更し同心社らしと申々也其實ハ由と思ふ人ハ如く結局
長野かくは軍形不中しハ逸打立と云程ハ倉賀野
六郎を大將とし同淡路守見田六郎左衛門尉上田又

次郎松本兵部丞吉久和回左衛門尉業繁同兵庫元宗勝
等相集く都合二万三千餘又天文十六年九月下旬甲子
へ攻入へしと碓氷嶺乃ありて坂本松井田了陣をとる
其勢幾方と云ふに計は知へ切らざると云ふに旗馬印の
様を聞けり武蔵上野乃兵士の大形打立たりと聞えり鳴
呼懸しと信列路へし聞えけり内ふ小室乃城々ふくゆ
中川防戦の用意をせし早馬を甲府へ送る事の躰を
進を晴信朝長代履瘡病とく病床に坐りけり左馬助
信繁小穴山伊豆守信良及以是輕大將田人を副く諷方
乃番より指而るに板垣信方を呼送し上列勢乃討ふの
大將と称し相送ら面々栗原左兵衛尉詮冬日向大和

守是吉小山田左兵衛尉信茂小室山丹後守昌友逸見勝
沼小曾南郡信列先方乃芦田下野守信守相木市兵衛正
朝等乃勢合せし七千餘人十月二日小甲府を立拍し拍
く押殺し同六日乃己刻に信列佐久郡輕井澤に馳付く
段々乃次第を定めて列を引上り勢乃先子又千餘人上野
又次郎見田又郎左衛門碓氷味乃東坂劍石乃邊より押
詰後陣の勢を待處へ板垣先陣に進んく味を打散々
了切崩せば上野に先備後田丹後守ハ廣瀬郷左衛門了
討し師岡隼人の三科肥前守子討し白倉弥吉郎ハ上野
豊後守子討し先鋒忽ち敗走し甲軍此るを逐く首を
獲て一子二百十九級とて板垣一戦に討勝其日午刻に

勝因乃法式を執り不爰不真因禪云幸隆ハ及向乃妙術
を得て武氣上登乃諸將を確永嶺へ誘引せし一囊中の物
を探ふより中猶安くと大勢を切願し以て共長野信濃
守業正より打おさるを心悪く思ひ竊し甲府へ飛脚を
送りせ武義上登乃若共北條氏康子切立らば城を落さ
せ陣を破らせしと教度と云を以て武田家との多箭
の本度そ初形ふく大將乃御旗を向玉とぬと逆順遺眼
子以かきと中せ一か及晴信朝臣何と由上被宿乃者
乃批判中後罷し痛苦乃者子我場の出とから及形也瘰
治の故子隱病乃各取し打中若と中進めや兵と勇ま
せく馬をおしむ人及甘利後之昌忠馬場民部少輔信春

淺利式部丞信音秋山伯耆守晴近原加賀守昌俊内儀後
理亮昌豊諸角豊後守昌晴等を先とく是輕大將入ハ
小幡穢部心虎盛原美濃守虎胤山本勘助晴幸曾根七郎
左衛門安間三右衛門等なり其勢口より百餘人甲府を
立く程ゆかく志賀乃笠原新三郎上被勢と一川子成く
晴信朝臣乃者馬を走んとや手勢を以て打おたす晴信
朝臣是を見く惡い笠原の振舞かを誰とあるある馳向
く蹴散せと下知く多へは春日源又郎承里以とく一文
字不突からしむるは笠原叶と以引退くを追討し打く
新那由路次了運備せ以輕井深く着陣あり上列方入ハ
板垣不先陣ハ切負しかと中後陣ハ嶮しと板路不碍ら

也軍場を小見せしむる者共今一度有る乃一戦をと思儲
大分時分は晴依船長乃着陣を聞や若二万六千餘人
二乃合戦を拵く碓氷峠の折上る甲列勢ハ飯富虎呂を
先陣とあし熊野権現乃表の中より名をぬく鉄炮乃上
手共を膝より打せけりかかると武者乃體の毛付く
を打よる心安く打落せば上列勢仁王乃唾く屈足
進み虎呂を見せぬ鐘を入ると云ゆさくぬ飯
富と與力三百餘人一交小せ以唾とおめりく突か
倉賀野六郎真先進く昨日乃臆病者と一様思入
かよと聲を揚ぐ折合ひ處へ武田重代花菱乃旗
嶺へ颯と差揚たるとはや晴信朝長旗本を以て二陣小

續き玉人と見え程に飯富の備は火將乃跡を誑ら
ふ一足小引たらんを末代中く乃瑕瑾有り死や兵と互
に勇の勇らも輪實乃巖を碎く勢由肩から以殺氣整々
と敵乃陣へ覆ひ掛りては倉賀野六郎終に敗軍以志
出りし備へ後閑山上一支も支以坂本さく引返せ
は武義上野乃兵士等武田勢乃旗乃小た見せ終に裏
崩し崩立を捨親を顧み我先ふと已々生所へ逃
歸り甲列勢ハ坂を下りし追撃し未乃下刻より酒乃
刻乃終りし敵を打て己の二百六人とかや晴信朝長
其夜首帳披見ありし晴信を揚ゆり其武板垣乃執り
以體と様替り威儀嚴重に役々乃所務丁寧を以るか

ハ初板垣乃美々しく見へしハ層からハ大將輕井澤子
二日逗留中ハ由々分捕乃兵糧を盡し板垣をハ今暫
上列勢乃景氣を見よやと留め置同十日子凱陣あり
蓋幸陰信利乃諸士を問し村上方乃羽翹を殺佐久小
縣乃諸城主を降し其功を以て舊領不復し又上板幕下
乃諸士を問し其功を確氷嶺不破長野伝濃吉を疑
ひ晴伝朝臣を激し板垣を短慮ふし自専を致せ救
せんを爲ふ凱歌の式を奉し信方乃徳とて親を篤
とんを根株云へ但其謀略深遠ふし人其影嚮を承
色乃形し獨長野業正あり是を察知し其術中ハ隔る
子及てハ是又材子長短測るへうとて所所有か故あり

